

沖縄戦・集団自決の記憶と記録に関する社会人類学的課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学商学研究所 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山内, 健治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22407

「沖縄戦・集団自決の記憶と記録に関する 社会人類学的課題」

Social Anthropological Problems of Memories of “Group Suicides”
and the battle of Okinawa

山内 健治
Kenji Yamauchi

はじめに

はじめに筆者が沖縄戦の証言や体験記録に関わる社会人類学的な立場から記述する目的と動機について述べておきたい。筆者の沖縄での長年の調査地は沖縄県中頭郡読谷村（よみたんそん）であり、沖縄戦においては米軍による本島上陸作戦の第一目標となり1945年3月末の艦砲射撃及び同年4月1日の上陸作戦により村落の大半が壊滅的な状況におかれた村である。また、戦後も村落のほぼ全てが米軍基地に接収され、2021年現在でも約36%が軍用地に接収されている。

調査地では、戦後の家族・親族の構造・神行事や聖地、エイサーをはじめとする伝統文化の継承や共同体の復興を記録してきた。そうしたフィールドワークにおいて人類学的基本データとして各世帯の親族系図や家族のライフヒストリーを記録してきた。その過程で、実に多くの戦争犠牲者が親族系図に現れ、それを書き入れながらの聞き取りの多くは、民俗的な事象よりもむしろ戦争体験の話を書くことの方が増えていった。また、読谷村は上陸地点であったこともあり、多くの戦跡やいわゆる集団自決の記録が報告されてきた地域である。(図1)は読谷村における戦争関連の戦跡を示したものである。

(表1)は、住民犠牲者の地点と人数である。宇座の(ヤーガー)は空爆により犠牲者を多数出した住民避難壕である。楚辺クラガーは米軍上陸後、鍾乳洞の湧き水内で住民の入水自殺のあったとされる場所である。波平地区のシムクガマは、千人を超える住民の避難後、無事救出された壕であり、チビチリガマは、住民の自決により83名の犠牲者を出した場所である。読谷村歴史編集室の資料によれば、読谷村の戦没者数の内訳は軍人・軍属2,167人、一般住民1,757人、計3,924人である。同資料の別表「村民の戦没状況」の内訳は、砲撃他(2,000人・51.0%)、栄養失調・病死(1,229人(31.3%))、船舶遭難(198人・5.0%)、集団強制死「集団自決」(130人・3.3%)、行方不明(49人・1.2%)、その他(316人・8.1%)となっている。

同村、波平地区住民の避難壕であったチビリガマをはじめ、実のところ沖縄県全体の集団自決・入水自殺・住民虐殺犠牲者・行方不明者の全容はまだ把握されていない。『沖縄タイムス』(同

図1 読谷村の戦跡



『読谷村の戦跡めぐり』（読谷村 2007）地図デジタル版より転載、
<https://yomitan-sonsi.jp/sonsi/senseki/map/index.html>

表1 読谷山村内での戦没状況・死亡場所

死亡場所	(昭和) 18年以前	19年	20年	21年	22年	不明	計
宇座（ヤーガーを含む）			30			1	31
瀬名波・渡慶次・儀間・長浜の集落地帯		2	22				24
喜名（親志を含む）		3	50				53
伊良皆・長田		5	57				62
比謝・比謝橋（比謝川沿いを含む）		1	27				28
大湾・牧原		2	17				19
渡具知・古堅			13				13
楚辺（クラガーを含む）		2	35				37
都屋			6				6
座間味（北飛行場を含む）	1	17	51				69
波平（シムクガマ・チビリガマを含む）		1	129	5	1	2	138
高志保	1		15	2	1		19
その他の読谷山村		2	25	1		1	29
計	2	35	477	8	2	4	528

『読谷村の戦跡めぐり』（読谷村 2007）付録より転載

2007年9月28日版)は「『集団自決』検定撤回2007.9.29県民大会の開催に向けて」と題して同社が独自にまとめた「集団自決」と「住民虐殺」の特集記事では、1945年3月26日慶良間諸島座間味島での177人の犠牲者にはじまり、同28日渡嘉敷島での326名の犠牲者、4月1日読谷村楚辺のクラガーの入水自殺、そして翌日の同村波平地区でのチビチリガマで83名の犠牲者、同年5月から6月にかけての本島でのおびただしい犠牲、そして沖縄戦の組織的軍事行動が終結した6月23日以降の10月、伊是名島での日本軍敗残兵による住民8名殺害も含めると、実に40件以上の事例を提示されている。また、それらが全容ではないことを、今後もアーカイブをする必要性を問いている。

筆者は沖縄の地域研究をする者として、戦後の地域研究史が軍事史ならびに政治・経済上の資料に傾斜する一方、民俗学をはじめとする沖縄文化研究は、戦争や基地化に伴う強制移転他への戦後の社会構造の変化を十分に描ききれていないことを自身の内省としても留意してきたつもりである。そしてまた、家族・親族研究の中に表出する戦争体験・戦後生活記録への未整理を反省すると共に戦争体験の記録と伝承に注視してきた。しかし、従前の人類学におけるいわゆるフィールドワークや個人のライフヒストリーの聞き取りデータとは異なりフィールドノートを公にするには多くの課題が立ちほだかり、その方法論上の脆弱性や問題は未だに解決していない。

さらに、筆者の動機付けには、読谷村を調査し始めた1997年頃、同村出身者を中心に民俗記録及び戦争証言記録活動を立ち上げた「琉球弧を記録する会」との出会いも大きい。1997年結成「琉球弧を記録する会」(代表 比嘉豊光・村山友江他)は、沖縄の消えゆく祭祀と戦争証言を徹底した島方言で記録する市民グループであった。我々、本土出身者が、標準語でインタビューし記録することの限界を痛感しながら、同会の戦争証言記録の現場に何度か立ち合わせていただいた。同グループの活動についての紹介から本論を始めたい。

I. 琉球弧を記録する会の活動と島唄の中の戦争伝承

1. 島方言による記録映像

「琉球弧を記録する会」は読谷村在住の市民グループによる活動として、沖縄で立ちあげられた祭祀と戦争証言記録を映像に収めるグループである。「琉球弧を記録する会」は沖縄を代表する写真家であった故比嘉康雄氏と読谷村在住の比嘉豊光・山城吉徳・村山友江氏により1997年に結成された。同会の主な目的は、島クトゥバ(シマ言葉・島方言)による消えゆく祭祀のアーカイブと戦争証言の記録である。彼らの戦争証言の記録手法は徹底して沖縄方言にこだわり、個人の体験を語る言語・表情をムービーに記録・収録し続けることにある。収録現場では特にインタビュー事項や台本があるわけではなく「戦世(いくさのゆー)の話聞かせてください」程度の導入に始まり、話者は淡々と、時には涙ぐみながら、時には堰を切ったように、一気に脳裏に溜まった記憶を吐き出すように語り始めることもある。語り終えると多くの話者には満足感が漂う表情もうかがえる。その表情は、米軍占領期にアメリカ側のインタビューによる記録フィルム

に映る怯えた表情、困惑した姿、あるいは戦後日本のメディアによる戦争体験取材に映し出される戸惑いがちな表情ではない。これらの作品に映るのは、育った故郷のシマ言葉で語り尽くす話者自身の画面いっぱいの表情のみであり、従前の記録映像にある戦場写真の挿入やナレーションは一切ない。上映の相手は公共的な漠然とした一般ではなく、沖縄県民に、さらに言えば、語ってくれた本人に向けられている。だから、一作品が収録されると、まず話者たちの住む地元の市町村の字公民館などで上映されてきた。当初の試作品には、標準語のテロップすらなかった（現在は標準語字幕が付されている）。証言記録が進むにつれ100名を超えた頃、「島クトゥバで語る戦世—100人の証言」という6時間にも及ぶドキュメンタリーになっていた。2003年度の山形国際ドキュメンタリー映画祭に招待作品として6時間連続で上映された。その後、この記録映像は現在、1,000人を超えて慰霊の日には摩文仁の平和資料館でも上映されている。その写真・文字資料としては、標準語対訳付きで3冊の報告書にまとめられている。この作品群と戦争の記憶・伝承の役割について考えてみたい。

もちろん沖縄戦の体験記録映像は、本土の出版・映画会社・マスメディア等により編纂された作品も少なくない。だが、『島クトゥバで語る戦世』の話者たちは「あれらはママゴト」（対訳）「戦世はシマ言葉でしか語れない」という。そして「戦やちゃっさ何りちん、当た一とねーんしが一分からんど」（対訳）「戦争は体験したものにはかわからない」と個々のシマ言葉で体験を自由に語り続ける。ここに、収録された、ほんの一コマを紹介してみる。

現地召集兵であった比嘉誠春（大正14年生まれ・読谷村楚出身）は、5月末から7月5日にかけて、首里近くのガマから南部の喜屋武岬周辺を敗走した。その中で、ヤマト出身の日本の兵隊がお互いを惨殺する光景を目の当たりにした経験を語る。『島クトゥバで語る戦世』（琉球弧を記録する会編1997：2-42）から一部、引用抜粋してみよう。

「首里の伊原のガマで、うぬ兵隊があぬー自殺すりよ、自分ね鉄砲し、此処、自分くる撃っていよ。あんさーなかい順ねー、一射ゆーさんよ。あんさーなかい直ぐ顎え砕きてーよく、物お言うさんなてい。あんさーなかいურიそーしが、本人のなーさ苦さる有りぐとう、「殺しよー」しちょう」。対訳「その兵隊が、自殺しようと、自分の鉄砲で、ここ喉元を自分で撃ってしまった。しかし、ちゃんとは撃てず死に損ねてしまった。顎は砕けよ、ものも言えない。本人はもう苦しくて、「殺してくれと」と言う」。

この後、話者の比嘉さんは日本刀で切ることを上官に命令されたが、どうしても切れないと断る。結果、分隊長が狭い洞窟では太刀を振り下ろせないでいるので、寝かして薪を割るよう様相で上官がその兵隊さんをゴンゴン切った情景が、淡々とシマ言葉で語られる。また、南部の喜屋武岬でも、破傷風にかかりワーワーと叫び痙攣する日本兵を他の日本兵がいきなりピストルで射殺したこと、その後、米軍の砲撃で自分の足を撃ち抜かれ、一人で敗走し、ウジ虫が足先から湧き始め、激痛をこらえながら海岸で足を潮水に浸すとウジがウヨウヨ、波間に浮かんできたことなどが語られる。後半の語りの中で「な一人おあらんのーあたさいや、動物と一同ぬ物などーぐどう、平気」（対訳）「もう人間じゃない、動物と同じになってしまっぺ平気」という語りが印

象的であった。これらの作品に登場する話者は、全て実名でシマ言葉で語り続ける。語りながら当時の記憶が蘇り録画が進むにつれて自分の育った独特のシマ言葉とイントネーションが強くなり、沖縄県内出身者でもかなり聞き取りづらくなっていく場面もある。

この作品の個々人のシマ言葉による戦争証言について今一度、考えてみると、私たちに戦争ドキュメントの本質的な課題を突きつけてくる。「匿名」ではないウチナーンチュ（沖縄出身者）個々の戦争証言—そして、あの時代に個々の身体に刻み込まれた表現としてのシマ言葉にしか彼ら彼女らの「個の戦争体験」の真の表現とリアリティがないことを再認識させるからである。この沖縄からの異議申し立てのような証言から想起するのは、今まで内地資本によるマスメディアにより作成された映像作品群はオキナワとヤマトの相互にイメージ、創造化された結果の作品群でしかないようにも思える。75年以上前に戦世に身体化されたシマ言葉の記憶と表現は「匿名」「消費」化されない「戦争体験」をリアルに蘇生させた記録でもある。このドキュメント作品群は視聴する我々が証言者に近づくというより、話者たちが、我々に迫ってくる。

現在、琉球弧を記録する会は、上映会と共に関連する写真展を定期的に開催している。糸満市の公民館や摩文仁の平和史料館、沖縄県立博物館他、国立歴史民俗博物館（千葉県）でも上映を行なっている。また、最近では沖縄県内の大学の講座でも上映する機会があるという。同会の作品は、当初「平和学習」のために作成されたものではなかったが、この沖縄側からの方言記録は「戦場」の現実の記憶を通して結果的に若い世代へ、さらには次世代へ伝承するツールとなってきたとも言える。この作品が、沖縄側から沖縄へ向けて作成されたと述べたが、この作品を見る本土の若い世代がどのような感想を持っていたかについても付記しておく。2003年度の山形国際映画祭の後、明治大学校舎内で一般市民、学生にむけて上映する機会を得ることができた。その感想は、「言葉は全く、わからないが、自分のおばあさんが出ているような気がした」「自分の出身県の方言で祖父の戦争体験について聞いてみたいと思った」「チビチリガマは修学旅行の平和学習で行ったことがあるが、あのガマの中で、この画面に写り語るおばあさんが、当時、体験したこと、また、あの薄暗いガマにこのおばあさんが若い時にいたと思うと時間がタイムスリップしたような重い気持ちになった」等であった。次世代へ「戦争」とは何かを考える機会を提供し続けるものと思う。そして、日本の戦後と沖縄の関係を問い続ける映像の一方法と考えるのである。

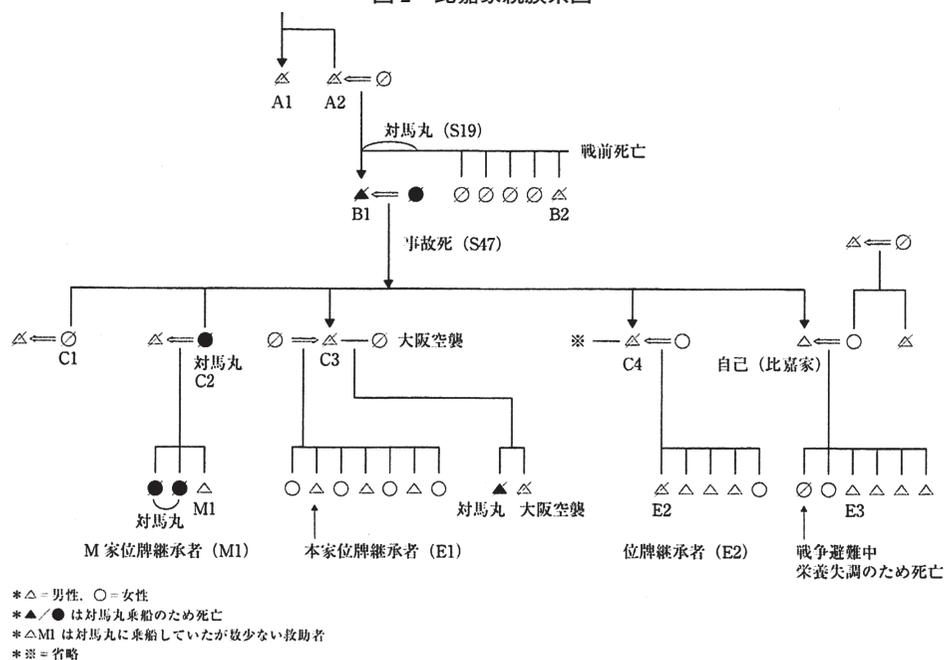
2. 島唄の中の戦争伝承<艦砲ぬ喰えぬくさー>

前述の琉球弧記録する会編『島クトゥバで語る戦世—100人の記憶』（2003）ドキュメンタリー映像の完成と同時に同タイトルの冊子が制作されたが、その際、筆者も同誌にコラムとして「島唄の中の戦争伝承<艦砲ぬ喰えぬくさー>」と題した拙稿を寄せた。その際に戦争の記憶と記録に関するメモやデータから筆者なりに考えたことがある。以下は、当時、説明しきれなかった個々人の戦争体験を人類学的に記録する意義をより具体的に付加して、今回、改めて原稿を書きなおしてみたものである。

『島クトゥバで語る戦世—100人の記憶』のドキュメンタリー作品には、戦争体験を三線民謡の形で語り継いできた曲が挿入されている。戦争体験の伝承方法には、史誌・映像・文学・詩・琉歌・絵画等さまざまな方法があるが、島唄も一つの手段であるし、またそれは、島言葉によるもっとも身近な口頭伝承とも言える。

戦争、そして、戦後の避難所・捕虜収容所での生活体験にもとづいた代表的な作品としては、『屋嘉節』（作詞：金城守賢，作曲：普久原朝喜）、『敗戦数え歌』（作詞：金城守賢）、『PW 無常節』（作詞：金城守賢，作曲：普久原朝喜）、『石川小唄』（作詞・作曲：小那覇舞天）、『終戦数え歌』（歌：山川千代治）、『姫百合の歌』（作詞：小宗三郎）、そして『艦砲ぬ喰えぬくさー』（作詞・作曲：比嘉恒敏）等があげられる。この歌が作られ歌い継がれてきたコンテキストを考えたみた。理由は、読谷村の門中墓や親族系図の調査で、作者：比嘉恒敏氏の弟である楚辺在住の比嘉恒健氏に、ライフストーリー他、生活史を聞く為、以前より度々インタビューに伺っていたからでもある。比嘉恒敏氏の戦前・戦後の生活史の詳細は（山内健治 2019）にまとめているのでここでは割愛し、その親族系図を（図2）に掲載しておく。

図2 比嘉家親族系図



同曲の作詞に関係する箇所のみを、ここに補足説明を加えておきたい。作者の比嘉恒敏氏も読谷村楚辺の出身である。彼は戦前、大阪に仕事の都合で転居していた。1944年の大阪大空襲により妻と次男を失った。長男を楚辺の実家に残していたが、この長男を含む父・母・姉と子供達、

計6人は、1944年8月22日、疎開船「対馬丸」に乗船して本土疎開中、米潜水艦・ボーフィン号により撃沈され行方不明・死亡している。なお同船に乗船していた姉の子供一人は、奇跡的に救出されている。この対馬丸での死亡者は学童がほとんどで1484名の命が奪われた。終戦後、恒敏氏は沖縄に戻り、艦砲射撃により破壊された故郷を見ることになる。おそらく、読谷村の荒廃とした故郷の景観に立ち、我が子、父・母・姉妹・甥姪、8人もの身内を失った孤独感を表現するには「艦砲ぬ喰えぬくさー」という言葉しかなかったのである。この言葉は、戦後、同じく読谷に戻ってきたオバがつぶやいた言葉という。その後、恒敏氏は、再婚し、7人の子宝に恵まれている。この頃のことを唄中、3番で、カタツムリのように次々とできた子供の笑い声に癒されると歌っている（本節の末尾に同曲の歌詞を付記した）。『艦砲ぬ喰えぬくさー』が完成したのは娘たちによれば、1969年という。その時代、沖縄はベトナム戦争への発信基地として再び戦争が身近に感じざるを得ない状況下にあった。唄中、4番・5番では、「平和になってから何年たつか／再び戦争がきやしないかと夜も眠れない／生まれ変わっても忘れることのできないあの戦争／子孫末代まで伝えたい」と唱う。恒敏氏は、この曲を作った4年後、国道58号線を運転中、米軍人車輻に激突され、同乗の妻と共に他界した。享年56歳であった。娘たち4人は、すでに父と民謡指導者である前川朝昭氏に民謡を習い1962年より「でいご娘」として活動を始めていた。1975年、残された娘4人は、父の遺作『艦砲ぬ喰えぬくさー』（マルフレコード）をレコーディングした。比嘉恒敏氏家族は、上門（いいじょう）門中の親族である。先述の通り、筆者は、その弟の恒健氏宅で比嘉一族の門中系図を聞き取りを行っていたが、系図をノートに落として見た時、こんなに大勢の身内が戦争の犠牲として亡くなったのか、正直、驚いた。この門中が戦後、復興してゆくライフヒストリーを何度も恒健氏に尋ねていた。それは、唄中3番の「泥の中から立ち上がり」の時代であった。

筆者は、実のところ、でいご娘の『艦砲ぬ喰えぬくさー』をそれまでは直接聴いたことはなかった。2003年7月、琉球弧を記録する会の映像記録の現場のサポートで、初めてこの唄を聴いた。三女により、父の戦争体験の追憶や戦後の思い出が、三線の伴奏と共に淡々とした唄声 flowed。場所は、米軍上陸地点である読谷村楚辺海岸であった。この収録後、毎年、でいご娘の道場兼練習場所に訪問するようになった。恒敏氏の人柄や比嘉家の現在を知りたかったからである。四姉妹から見た父親は、民謡の師匠であると同時に厳格で、家族思いの父であったという。弟（恒健氏）から見た兄（恒敏氏）は、几帳面で真摯な働き者であったという。また、その真面目な性格から恒敏氏は、戦後の混乱期、若者の悪事を監視するような指導的存在であったという。それでも、戦後の生活の困窮から弟たち若者が、基地内の米軍物資を戦果として村内へ流出させることには見て見ぬ振りをしていたという。唄中2番に出てくる「戦果かたみてい、すびかって／肝や誠たるやたしがや」の一節である。2番の冒頭部の「神ん仏ん頼らん」の一節は、勤勉な一人の男の家族や生活が戦争という名の下に根底から破壊されてしまった無常さへの悲痛な叫びと怒りにも聴こえる。戦争はあらゆるものに不幸をもたらし、それでも真摯に生き抜こうと恒敏氏の人間性と不慮の事故により急逝した無念さを思い浮かべた。

弟の恒健氏にも辛い戦争体験がある。現地徴用の防衛隊に招集されていた恒健氏は家族と離れ、戦場での逃避中、5月末に米軍の捕虜となる。防衛隊員であったからである。その後、米国ハワイの捕虜収容所に送られる。捕虜収容所では、これからの自分のこと、家族の消息を考え続けていたという。翌年、釈放され沖縄へ帰還、妻の収容されたいた避難民キャンプで妻と再会するが、長女は避難途中に栄養失調により亡くなったことを知る。

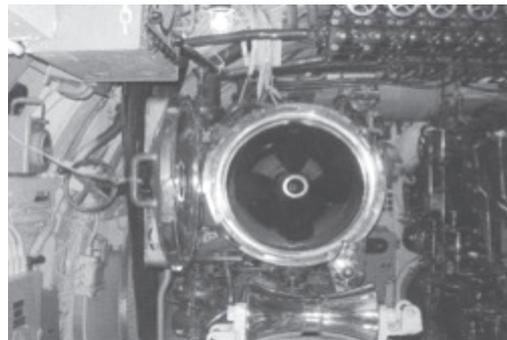
2002年、筆者は、恒健氏が収容されたオアフ島にあるサンドアイランドの収容キャンプ跡地を訪ねてみた。また、パールハーバーを数度、訪問し潜水艦ボーフィン号を撮影した。理由は「対馬丸」を撃沈させた潜水艦だからである。米国海軍所属ボーフィン号はパールハーバーの潜水博物館敷地内ドッグに繋留されていた。説明パンフレットには「パールハーバー・リベンジの潜水艦」として英雄伝が記されていた。ボーフィン号の艦内に入ると艦先頭部には、魚雷と魚雷発射管の蓋が開かれ公開されていた。この発射管の向こうで、沖縄の児童達他、1,484名が犠牲になった事を想起すると共に比嘉家の系図を思い浮かべていた。博物館内には、ボーフィン号の戦果を示すフラッグが飾られていた。それは撃沈した数だけの旭日旗(日本軍艦船)、日章旗(非戦闘船)を示しており、数えてみたら旭日旗6枚、日章旗45枚であった。ここでは、対馬丸犠牲者1,484名の命は、僅か数センチの「日の丸」で表象され、犠牲者のその後、あったであろう無数の普通の生活や幸福を奪い去ったことは、同博物館のどこにも説明は見当たらなかった。

図3-a 米国海軍所属ボーフィン号



2002年・筆者撮影

図3-b ボーフィン号 魚雷発射管



同・筆者撮影

少し前置きが長くなったが、同博物館を訪れた頃より、戦争体験やその記憶を次世代や他国の人々に伝承することの困難性、また社会人類学の視点から戦争を記録することの意義と課題を模索するようになった。

戦争博物館の展示内容の問題だけをとりあげても、その公平性・公共性は多くの課題を内包している。戦争終結時点において戦勝国対敗戦国という政治的バランスが既に存在しているからである。こうした問題意識については、米国の戦争人類学研究者であるジェフリー・ホワイトもスミソニアン博物館での広島原爆特別展の中止の背景や太平洋地域の戦争記録のあり方に内在する政治的圧力と歴史展示の問題を指摘している。また彼は「体験と記憶は常に所与として媒介され

散るのであり、常に権力関係によって形成されている。とりわけ今日の社会的かつ文化的対立の枠組みの中での現在の目的のための一手段として、過去を表現し、再現するもの」として戦争の体験や記憶が例え曖昧もしくは不確かな個人的なものであっても現在から遡求する歴史記録の正当な実践方法であることを主張する (Geoffrey M.White 2001 : 1-29)。

筆者も国家が戦争を記録することは、そのこと自体が政治的領域の作業と表裏一体と考える。そして、本来、社会人類学は国家レベルではない常民・民間人の個々の記録を業とすることにより、国家レベルの集合的記憶や公共的領域を出てミクロな個々の記憶や文化記述を行ないながら考察してきた。政治的権力に巻き込まれずに戦争体験を記録することの意義は国家の集合的記憶・記録から一見、正史に見える戦争記録の集合体を作り出すことではなく、個々のミクロな戦争体験・証言を積み重ねた文化記録・遺産とも言える。このことをふまえれば、個々人のライフヒストリーや口頭伝承の記録あるいは異なる文化の比較を行ってきた社会人類学は、戦争の記憶と記録その作業により積極的に関わらなければならないと思う。以上の視点からも、「琉球弧を記録する会」が進めてきた島方言による戦争体験の記録方法の重要性を再認識すると同時に、その作品群が沖縄の現在までの政治的権力構造からいえば対日本、対米国という二重・三重の権力バランスの中で記録されてきたことを学ばなければならないと思うのである。

本節の結びにかえて同曲の歌詞と対訳を付記しておく。

「艦砲ぬ喰えーぬくさー」

作詞・作曲・比嘉 恒敏
唄・でいご娘

- | | |
|---|---|
| <p>1. 若さる^{とうち}時ねー^{いくさ} 戦^{ゆー}ぬ世</p> <p>若さる^ち花ん 咲^うちゆーさん</p> <p>家^やん元^{くあん}祖^すん 親^う兄^や弟^{ちよ}ん</p> <p>艦^ち砲^{せん}射^ま撃^{とう}ぬ 的^ま的^{とう}になてい</p> <p>着^ちむん 喰^くえーむん むるねーらん</p> <p>スー^ちテー^{せん}チャー 喰^くでい</p> <p>暮^ちら^{せん}ちゃんやー</p> <p>う^んじ^{ゆん} わんにん</p> <p>い^やーん わんにん</p> <p>艦^ち砲^{せん}ぬ^く喰^ええーぬ^くさー</p> | <p>1. 若い時には 戦の世</p> <p>若い花も 咲かせない</p> <p>家も元祖も 親兄弟も</p> <p>艦砲射撃の的になって</p> <p>着るもの 食べ物 何も無く</p> <p>ソテツを食べて</p> <p>暮らしたね</p> <p>貴方も 私も</p> <p>お前も 私も</p> <p>艦砲の喰い残し</p> |
| <p>2. 神^{ふとうき}ん仏^ん た^ゆららん</p> <p>畑^はやかな^あみ 銭^{じん}ならん</p> <p>家^や小^{くわ}や^か風^かぬ う^っとう^ばち</p> <p>戦^{せん}果^{くわ}か^たみ^てい す^びか^つてい</p> <p>う^っち^えー ひ^っち^えーむ^たば^つてい</p> <p>肝^ちや^ま誠^まく^{とう}る^やた^しが^やー</p> | <p>2. 神も仏も 頼らない</p> <p>畑は金網 金にならず</p> <p>家は風に 吹き飛ばされ</p> <p>戦果担いで 引っ張られ</p> <p>散々 痛めつけられたが</p> <p>心は誠だったよ</p> |

3. ^{どる}泥ぬ中から 立ち上がてい
^{ちねー}家内むとうみてい ^{とうじ}妻とうめーてい
^{なしぐわー}産子ん生まりてい ^{めーにん}毎年産し
 次男 三男 ちんなんびー
 あわりぬ中になん わらんちやが
 笑い声聞ち肝^{ちむ}とうめーてい
4. 平和なていから ^{いくとうし}幾年か
^{くわ}子ぬちゃん まぎさなていをしが
 射やんらったる やまししぬ
 わが^{くうむ}子思ゆる如に
^{うすみじ}潮水又とう ^{うむ}んでい思れー
^{ゆる}夜ぬゆながた 眼くふわゆさ
 うんじゅん わんにん
 いやーん わんにん
 艦砲ぬ喰えーぬくさー
5. ^{わーうや}我親喰たる あぬ戦
^{わーし}我島喰たる あぬ艦砲
^{わし}生まれ変わていん 忘らりゆみ
 たーがあぬじゃま しーんじゃちゃら
 恨んでいん 悔やんでいん あきじゃらん
^{しすんまちでー}子孫末代 ^{いぐん}遺言さな
 うんじゅん わんにん
 いやーん わんにん
 艦砲ぬ喰えーぬくさー
3. 泥の中から 立ち上がり
 家庭求めて 妻をめとり
 子供も毎年のように産まれ
 次男 三男 ちんなんびー
 哀れの中にも 子供達の
 笑い声を聞いて心を癒し
4. 平和になって 幾年か
 子供たちも 大きくなったが
 射られた猪が
 話が子を思うように
 苦汁を又も思うと
 眼がさえて (夜も眠れない)
 貴方も 私も
 お前も 私も
 艦砲の喰い残し
5. 私の親を喰った あの戦争
 私の島を喰った あの艦砲
 生まれ変わっても忘れられようか
 誰があのごまをしでかしたのか
 恨んでも悔やんでも飽き足りない
 子孫末代 遺言しよう
 貴方も 私も
 お前も 私も
 艦砲の喰い残し

図4 艦砲ぬ喰えー残さー歌碑



2013年6月23日慰霊碑の日、読谷村楚辺海岸に建立、筆者撮影（2019年）

II. 強制集団死<集団自決>と教科書検定問題

1. 強制集団死<集団自決>の証言記録—チビチリガマ

読谷村で少しずつ聞き取りをしてきた戦争体験資料にもとづいて日本文化人類学会研究大会(2008年5月31日)で「戦の世を越えるエスノグラフィー Vol.II 沖縄戦・強制集団死(集団自決)の社会人類学的考察」と題して発表する機会を得た。以下はその時の発表要旨である。

本報告の事例は沖縄戦において日本軍の示唆・誘導・指示・軍令により起こった住民の集団自決(強制集団死)の状況の聞き取りデータである。対象は沖縄本島の陸地点であった読谷村波平地区の集団自決である。米軍上陸開始日時、1945年4月1日午前8時30分以降、極度に緊張した村住民は、翌日の4月2日の午前11時頃より避難壕であった<チビチリガマ>で、いわゆる集団自決をはかり83名が亡くなった。この地域の戦争体験証言については、これまでも『読谷村史 戦争編 上・下巻』(読谷村 2002・2004)をはじめとして報告されてきた。また2007年9月29日に宜野湾市で開催された「教科書検定意見撤回を求める県民大会」においても、読谷高校生徒2名により集団自決に関わる引用から大会宣言のアピールが朗読された。発表報告者は、チビチリガマからの生存者である上原進助氏(現在ハワイ州・オアフ島在住・1945年当時12歳、沖縄本島・波平出身)の記憶の記録にもとづいて以下の項目について考察する。

- ① 集団自決が発生した社会構造の分析(日本軍の示唆・誘導・指示・軍令)
- ② 身内に犠牲者を出した遺族であり戦争証言者である話者の立場と匿名性について
- ③ 集団自決の記録活動の位置付けと社会人類学的な聞き取りデータの社会的・教育的貢献
- ④ 集団自決の発生した村落を離れて体験を証言することの意味

しかし、この研究発表の前後にも、いわゆる集団自決の現場体験と、その記憶を学術的に記録することの意義や公表するにあたっての公平性や方法論上の困難性や課題を再検討していたが、その多くの課題を残したまま今日に至っている。その点をふまえて以下、戦争証言の記録と公表の問題に留意しながら記述してゆきたい。

集団自決の現場の記録の困難性には、複数の要因がある。一つには、その現場に居合わせた全ての人々が犠牲となった場合は多くのことが不明である。断片的情報は、戦後のいわゆる憶測や再解釈から歪曲される可能性もある。さらに、避難壕から生き延びた生存者は、肉親や家族・知人が犠牲者となった場合がほとんどであり、戦後は多くのことを語らない、語れない年月が長期に及ぶ。そして、その個々の体験や記憶をどのように媒体を通して公にするのかという問題も山積している。さらに、戦争証言の話者と聞き手の信頼関係のみならず、遺族会との関係性の課題もある。

こうしたことに関連して、『読谷村 第五巻資料編4 戦時記録』上巻(2002年)・下巻(2004年)の責任編集を務めた小橋川清弘氏は次のように述べている(2020年10月23日インタビュー)。「特筆しておきたいのは、聞き取り調査のことである。最初はその字の中心的インフォーマント

から始め、その中で具体的な氏名が出てくるとその方を訪ね話を聞く。するとまた次の方の氏名が出てくるから、そこも訪ねる。こうしたことの積み重ねであった。さらに、対馬丸の生存者の方のヒアリングには7年の歳月が必要であった。最初に断られ、また断られ、遂に7年後実現した。理由は「孫が私のあの年になった」ということであった。また、一人の話者に10年かかったこともある。自身の手で我が幼子を亡くしてしまった方は、そのことを語るができなかったが、遂に話してくれた。3,924人という戦没者のそれぞれに人生があったのにとしつつも、生き残った人々中心に追いかけていたように思う。テープ起こしの過程では、編集スタッフが遺族・体験者の心の痛みに入りこみ原稿の筆が止まることも度々あった」(小橋川談)。

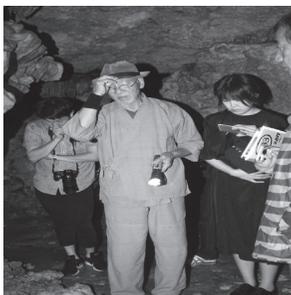
現在、小橋川清弘氏は、読谷村内での児童向けの平和学習や戦跡案内だけではなく県内外の高校生や大学生にも平和講座を依頼されて若い世代に話すことがある。その際にも戦争体験集作成の困難性や記録過程での苦悩も話されることがあるそうである。

以下に沖縄県読谷村波平地区の住民の強制集団死の起きたくチビチリガマの事例を検討してみたい。チビチリガマは、波平地区の約150名(31世帯)が避難した自然壕であり、住民83名が壕内で1945年4月2日、強制集団死により犠牲者となった(図1)(図5)参照。

図5-a チビチリガマ



図5-b 壕内部を案内する知花昌一氏



2019年6月24日・筆者撮影

図5-c チビチリガマ内部



(注) ガマ内には遺骨群と当時の生活道具がそのまま安置されている。

チビチリガマの戦争証言を語る話者はその現場に居合わせた方が複数おられるが、以下ではその一人、筆者が2004年のハワイ州の沖縄系移民調査中に知り合えた上原氏信助証言を中心に記述を進める。上原進助氏(現在牧師)は読谷村出身のハワイの戦後移民であり、沖縄戦で米軍が上陸した読谷村の自決壕チビチリガマの生存者である。当時、上原氏は12歳であった。戦後、沖縄で基地内労働やバス運転手を務め、その後、東京や大阪でトラック運転手をして働いた。1972年6月にハワイに渡り、現在は「ハワイイエス之御霊教会」の牧師を務めている。上原氏の証言は既にハワイ日系移民を対象とする『ハワイ・パシフィック・プレス』(1987年12月1日)上にインタビュー記事が掲載されているが、主にチビチリガマでの経験を語っている⁽¹⁾。

(1) 上原進助 1987 集団自決壕「チビチリガマ」生き残り・上原牧師が語る」Hawaii pacific press 12.1.1987の第8面に掲載。

さらに上原氏は2006年6月22日（日本時間）慰霊の日にハワイ沖縄センターで講演という形で体験談を語っている。このイベントはHOA：Hawaii Okinawa Alliance主催であり、2005年より毎年6月23日もしくは22日に、沖縄戦体験者を招き、彼らの記憶を在ハワイ沖縄系移民の子孫にも共有し、犠牲者の追悼と平和の大切さを確認することを趣旨に行なわれている。以下は、その時の講演を記録したものである⁽²⁾。

「今日は、ちょうど61年前の今日、牛島将軍は自決なさったということで、沖縄では1日早いですから6月23日は、公休日だそうです。そして、61年前の4月1日からのお話を致します。4月1日の朝、何時頃かは分かりませんが、私は12歳になっていました。61年前、12歳。それで分かりますね？今、73歳。4月1日、チビチリガマというところ、読谷です、そこにいました。いつぐらいからいたかという、3月の25日ぐらいからだったと思います。その「チビチリガマ」、What does it mean?と言ったらですね、川がね、こう流れてきているんです。で、そこで終わっているんです。そこからはほら穴になって、そして、どこに水がいつているか分からない。だから、そこで終わりだから、まあ、よくない話ですけども、チビチリガマとは、チリとは「オコレ」のことです。そこにほら穴がありまして、で、3月の25日頃から空襲、それから艦砲射撃、そんなのがあってもう危ないから、もうCaveに行った方がいいだろうということでした。それまでは、私が11歳の時に、Banyan Treeの根っこに穴を掘って、防空壕です。で、木の根っこの下は大丈夫って聞いていましたから、木の大きな根っこの下に穴掘って、家族、兄弟が4人、母とおじいちゃんと6人でその穴に入っていました。父は日本の兵隊でした。陸軍でした。比謝橋っていうところに行きました。それから、バッパと飛行機のあれが激しくなりましたから、おじいさんはチビチリガマに行きたくない、自分の家にいたい。で、私と兄弟4人と母と5人でチビチリガマに、26日ぐらいだったかな、3月の、チビチリガマへ行きました。で、艦砲射撃が激しくなったので、隣のおじいさんをpick up しに行きました。確か30日ぐらい。隣のおじさんと。そして、行く時に、夕方でしたから、日本の兵隊が5人ぐらい出てきました。そして、(兵隊に囲まれて)今にも殺されようと思いました。で、小学校に習ってました「山」って言ったら、「川」って言う。そういう何、暗号ですか。そういうこと習ってました。それで兵隊さんが、「山」って言ったら、「川」って言ったんです。それで「大した子どもだ」ということになりました。それで、おじいさんの家に行って、おじいさんをpick up して戻ってきました。それで、4月1日に上陸しましたから、もう大変なことになった。アメリカ、もうそこに来ているということでした。ところが、男の人2人、女の人1人、竹槍を持って「戦う」と言って、そのガマから出ていきました。そして、2人の男の人は手に弾当たりました。重傷。女の人には弾を撃ちませんでした。それで、もう怪我をした人は、壕の中に引っ張ってきて、それか

(2) この上原進助氏の講演記録は本人の承諾を得て川和清太郎氏（当時明治大学大学院博士後期課程）により録音、文字データ化されたものである。

らある人が「もうダメだ」と言って、Caveの入口、入口といっても本当に小さな入口でした。中は広がったです。その入口のところに布団、石油かけて、火つけました。が、2人のおばあちゃん、おばさんが、その火を「待て」って言って消しました。それで1日終わりました。で、今度は4月の2日です。それは9時、10時頃だったかと思うのですが、白人の人が、アメリカ人が、上は何も着ないで、ショートパンツで、小さいBook持って、フラッシュライト持って入ってきました。それには片方はローマ字で英語、片方は日本語で書かれていました。「戦争は負けます。でもアメリカの人は悪いことをしません」まあ、そういったことが書かれていたようです。ところが、中にいるbossみたいな人が、「見たらいけない！」と大きな声で怒鳴りました。でも、その白人の人は動揺しないで、ひとりひとりのところで、その懐中電灯を持って、ずっと、そのbossの前も通って出ていきました。それから、「もうダメだ」と言って、その中では「お母さん、産んで育ててくれてありがとう。でも、今日はお願ひ。殺してちょうだい」そういう声聞きました。それでお母さんが、その18ぐらいの人でした。●●●●(筆者削除)さんというような感じの人で、お母さんが殺しました。それで、子供を殺したけれども、親は生きている人がいるということも、私、聞いております。そこで、1人の看護婦さん、もう家族とお別れするために南部からお別れにきました。ところが(家族が)上陸したので帰れなくなりました。そこで看護婦さんは皆、その、旧本の兵隊の重傷の人ですね、もうどうにもならない、皆殺して、あの一、殺すように、毒薬の注射、注射を持たされていたそうです。それで、その毒薬の注射を「これからもう部隊に戻れないから、ここで使います」。それで、これは親戚、身内ですね、それとお友達、「でもこの注射を受けたい人並びなさい」って言って、人は並びました。そして、私も並びました。で、私の番になったら、「あなたは待っていない親戚、友達を優先にするから」。で、私はfrom that time, I was Christianで、I prayed「私に注射が当たりますように当たりますように」とお祈りして、傍で待っていました。で、last、最後のもの、「これは最後のものです。これは私のものです。これで終わりです」と言って、自分で注射を打ちました。それが済んだら、中の方で布団に石油かけて火をつけたんです。今度は中の方です。で、それから煙が。そういうcaveの中の煙はですね、こういう風にanimalみたいにゆっくり来るんですよ。わーっといかないで、煙は。それで母が「出よう。こんな苦しい思いして死ぬよりも、外で出て死んだ方がいい。出よう」って言って、もう一番先ぐらいいました。それで出ていったんですよそれで出てきました。大体150人ぐらい、子どもも大人も入れてね。その穴におりました。でも、生きた人は、そこから出てきて生きた人は、大体80人ちょっとぐらいだったと思います。それで後で聞いたんですが、私の父が「アメリカの人は、悪い人は1人もいない。皆、いい人たち」。日本の兵隊たちは、中国に行った、私の父も中国に行きましたから、悪いことたくさんしたから、もう今度は自分たちが悪いことされると思う。そう思っていたようです。でも、私の父は「アメリカの人は皆、いい人。だから、子どもたち、守ってくれよ」って母に頼んでいたようです、父が。というのは、私の父が「アメリカ人いい人」とい

うのは、missionaryの人たち、宣教師を見ているから、あれがアメリカ人だと思っていたんです。そして、父は4月1日に戦死しましたが、父の言葉で今、私は生きています。で、外に出たらですね、トラックに乗せられて、今でもワイキキで走っていますポートミtain、うーん、I don't know what it call that, あの水陸両々の。で、about 1 and half mile ぐらい、チビチリガマと都屋、同じ読谷です。行くときにですね、Tank あの戦車、戦車があっちこっちいました。アメリカのですね。で、そこから、1人の人がね、ハッチを開けて、ぬっと出てきました。その出てきた人が黒人だったんですね。That's why, おーっ、あのTankはすごい大きいエンジンがあるから、オイルが入っているんだね。それで汚れているんだね。それが私、一番最初の黒人の兵士を見たときです。もう終わりにします。」

以上が上原講演を文字化したものである。このハワイでの上原氏の集団自決に関する現場体験の講演で留意した点を整理すると以下の3点になる。

1) 沖縄という場所を離れた外国で自身の記憶を話されたことの意義と渡米2世以降の世代がどのように捉えたかについて、その後の関心度を再調査したい。

2) 今回の引用でも一部削除しているが、この講演内容でも沖縄の地元では、かなりの個人名が特定される。集団自決という事象の歴史的証明と匿名性のバランスの課題が残る。

3) 聞き手と話者と遺族会の関係性の課題。

この講演記録の後、上原氏が2007年9月の初めに東京経由で読谷村に一時、里帰りする連絡が入り明治大学の研究室でさらに詳細な集団自決の現場の記憶をのべ3時間に渡り話していただいた。筆者は、2007年9月29日開催の「集団自決「軍命」削除の検定抗議県民大会に参加することを決めていたので、かなり必要に「軍命」や集団死の起きた前後の壕内の様子に関わる質問を多くしていた。一方、長時間、上原さんにインタビューした結果、後のテープ起こしのデータを振り返れば、多くの実名が記されており、仮に全てを匿名化してしまうと話のコンテキストが理解できないような記録を含むものとなっていたため、それは、将来、他の媒体でフレーム化され伝承される可能性もあると判断し、その生データの全体公表は控えることに決めた。結果、(表2)に示した内容のみに限定して公表データとした。全ての基本データは未だ非公表のままである。その過程を説明するよりも当日のインタビュー記録のごく一部を開示してみると次のようなものである。

※前出従軍看護婦Aさんの毒の入った注射を住民が並んで受け始めた後に火の手があがった当時の状況への質問について。(話者以外、匿名化)

表2 チビチリガマ強制集団死 概況 話者：上原進助（昭和8年生まれ・当時12歳）

1945年3月25日	字事務所職員より避難勧告
3月27・28日	○波平の一部住民がチビチリガマに避難する。約150名 ○上原進助（12歳）、祖父を屋敷から避難させる途中、日本軍に出会う。
3月29日	○従軍看護婦A（18歳）が南部より波平地区に戻りチビチリガマに入る。
4月1日午前8時30分 午前10時	○米軍上陸開始 ○元従軍看護婦Aと波平住民男性2名が、表に出るが、男性2名銃撃され重傷を負い、壕にもどる。一度、壕内に火がつくが消される。
4月2日午前9時ごろ	○半ズボンの上半身裸のアメリカ兵が、壕内に投降勧告のビラをもって入る。 ○屋号S（元日本兵従軍者）が「見るな」と住民に怒鳴る。
4月2日 午前10時～11時頃	○元従軍看護婦A「楽に死ねる薬」の注射針を出す。 ○Aの身近な人より注射をうつ。（上原進助氏の前で薬途切れる）。周辺では剃・鎌等により、集団死がはじまる。 ○屋号Sのあたりから火がつく。 ○壕から出る者と、残る者で混乱する。 ○上原進助氏、母・妹とともに祖父をおいて壕外に出て、米軍に保護される。

2007年9月5日 場所 東京・明治大学校内

話者：上原進助氏、聞き手：山内健治・院生3名

以下、上原氏（以下U）、山内（以下Y）

※チビチリガマの壕内見取り図を見ながらのインタビュー

U：これから、全部ね、こっちまでね、ここのほうにSなんか、いたんですよ。上、～～ですよね、奥ですから。そうやってずっと回って、出て行った。出て行ったもんですから、「もう、駄目だ」ということになってね、「もう、もう、もう駄目」。それで、このあれは、Aさんですか、看護婦さんは。あの方が、「私はこういう薬品を持っている」と言って、そして。
Y：そこ、ちょっと、ゆっくりお願いします。Aさんはそれ、何時頃それ言いました？

U：この白人の人が出て行った後。

Y：午前10時くらい？

U：午前10時くらいになりますかね。

Y：で、それまでは言わなかったんですね。Aさんは。10時か、10時過ぎで。Aさんは、それまで、そんなこと言わなかったのに。

U：言わない、言わない。

Y：どういう言い方をしたんですか？

U：私は、こういうね、薬品を持っています、と。

Y：「こういう」って言ったんですか？

U：「こういう」というか、毒薬とは言わなかったね。あの、楽に死ねる注射かな、なんか、もう、そこらへんは、はっきり覚えてない。

Y：見せたんですか。具体的に。

U：いや、見てない。持っている。薄暗いですからね。で、まず、親戚、友達に、とそう言っ

て。みんな並んだですよ、列つくって。あの、楽に死ぬる薬とか、なんかいうことで。それで、並んだ。

Y：並んだのはどのへんに並びました？

U：いや、確か、ここらへんなんですよ。このBさんが・・・、ああBさんじゃない、Aさんがいたのは。だから、こういう感じで、こういう風に並んだ。

Y：壁際に。

U：そうそうそう。

Y：で、こっち段々高くなっていきますよね、多分。

U：そうそう。こういう感じでね。

Y：階段をこう並ぶように、階段のように、こう並んで行って……。そしてAさんがそこにいて……。

U：それで、済んだら、込み入って、こういう風にして、並んで、寝たですよ。

Y：こちら側からこう並んでますよね。で、打ちますよね。で、そこの……。

U：そこに寝るわけです。

Y：寝ると並んでる人たちの足下になる？

U：そう、そういう感じですね。

Y：みんなこうやって、で、並びながら、そういう人たちを見るわけですね。

U：そうですね。

Y：そうすると、それで、Aさんは……。何人くらい並びました？

U：わからない。私もそこに並んだんです。それで私の番になったときにね、この人が、「シンちゃん、ウレー、これはね、親戚と友達を先に……」、もう、方言で忘れたが、「優先です」と。で、「余ったら、あんたにもあげるから、あんたはそこにちょっと待っていて」と言われたですよ。その時にも、お祖父さんからも何でもお祈りしたら聞かれるというから、当たりますように、当たりますようにって念じて側にジーっと羨ましそうに待ってましたよ。
<筆者削除>

U：これで、火つけたんです。

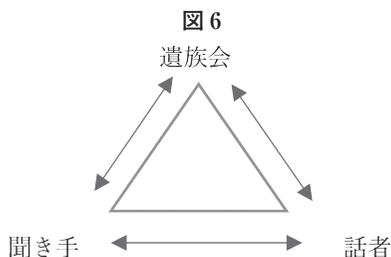
Y：それはどなたが火つけたんですか。

U：いや、わからない。おそらく、そう、もうね、今のそのSの人たちだったと思う。知らんけど、向こうから火が出たから。そして、あの煙ね、私、見ましたよ。今でも生き物のようですよ。魔物のようですよ。

以上が、3時間のインタビューデータの一部である。

この記録箇所だけでも、数人の個人が特定されるし、また、話者の憶測と思われる部分も含まれる。戦争証言を公表する時の苦悩はこの点にある。さて、これらの公表・非公表の証言記録からの課題を整理してみたい。

まず、集団自決の現場に居合わせた話者（生存者・インフォーマント）と聞き手である私との関係性及び遺族会との関係性の問題である。先にも少し触れたが、ジェフリー・ホワイトの述べる「体験と記憶は常に当事者の所与の媒体を通して、かつ今日の社会的・文化的対立の枠組みの中の現在の目的のための一手段として過去を表現し再現する」という理解に筆者も賛同する。この東京で行なったインタビューそのものも、聞き手（筆者）の目的において話者の体験と記憶は再現された過程とも言える。この意味では、多くの集団自決を取り扱ってきたマスメディア等の媒体との距離をおく必要性を再認識する必要がある。しかし、それだけで問題が解決したわけではない。より重要な課題は現在も沖縄県読谷村で生活している遺族ならびにその親族関係者との関係性、そして、シマ（字に近似する沖縄方言）の持つ関係性、あるいは、現在、旧村に居住していない、言い換えれば社会的他者の証言（県外他出・海外居住者含む）と地元意識の整合性と信頼関係の問題がある。聞き手・話者・遺族会との信頼関係を図示すると（図6）の通りである。



集団自決に限らず戦場での体験の記憶の再生に関しては、常に生存者と犠牲者への追憶が表裏一体の関係にある。また、犠牲者への記憶と記録は話者（生存者）からみた記憶からの再生とも言える。そして、その犠牲者には親族として繋がる遺族が現時点の視点から存在している。そうした関係の中で、集団自決の現場の記憶と証言の正当性は、聞き手と話者の双方向的な信頼関係だけではなく、聞き手と遺族会、話者と遺族会の三方向のバランスと対等性がなければ成り立たないと考える。また、その三者の関係性をつき詰めれば、聞き手の出身・立場・目的や対象とする地域共同体の連携性、さらには知識の共有化の元での相互補完性と言えるようなネットワークの存在が、公表の大前提となるように思われる。その意味では、研究者・調査者と称する筆者も含めた聞き手は、社会的来訪者に過ぎないのであり、先の「琉球弧を記録する会」のグループ活動のような地元・沖縄県民による沖縄への島方言によるインタビューの記録の持つ重さが認識される。

次節では、強制集団死<集団自決>の証言に端を発する訴訟や教科書検定問題についてふれるが、日本軍の軍命あるいは関与を意図的に否定する側の証拠資料と称するものの多くは、こうした聞き手と話者・犠牲者・遺族会との関係性の構築を度外視した一方行的なインタビュー内容から構築させられた産物ではなかったのではないかと推察される。

2. 集団自決と教科書検定問題

2007年10月26日沖縄県「教科書検定意見撤回を求める県民大会」には11万人を超す人々が土曜日の午前というのに集まっていた。この集会はそれ以前より徐々に進行していた歴史的事実を意図的に歪曲しようとする勢力及び文科省への抗議集会であった。抗議対象は、文科省の教科書検定に際する日本軍の関与に関する修正意見であった。

沖縄戦、とりわけ集団自決と日本軍の示唆・誘導・指示・軍令に関する教科記述の修正意見とこの間の経緯を簡潔に要約しておく。

1982年検定で、文部省の検定意見により沖縄戦の住民虐殺に関する記述が削除、ついで1983年検定では「集団自決」を先に書かせる検定意見を問題にした第三次家永訴訟が起きる。2005年、慶良間諸島の元隊長と遺族が、大江健三郎の『沖縄ノート』（岩波書店1970）の記述をめぐり同氏・同社を提訴する「集団自決」訴訟を起こした。2007年には、高校歴史教科書検定において「集団自決」に関する記述から「日本軍の強制」という部分が削除された。一連のこうした史実を歪曲させた教科書記述への修正意見に対して、沖縄側では、県議会と全国市町村議会での検定意見撤回を求める意見書可決、先の島ぐるみの「教科書検定意見撤回を求める県民大会」を開催することになる。その後、政府は沖縄側の世論を受け入れ教科書会社に訂正申請をさせる形で再度、軍強制への記述変更を認めた。なお、先の「集団自決」訴訟は、2011年、裁判所は元隊長の関与を認定し岩波・大江健三郎側の勝訴となった（謝花直美2019:81参照）。

慶良間諸島・座間味島における集団自決の現場の状況を克明に記した『母の遺したもの 沖縄・座間味島「集団自決」の新しい事実 新版』（高文研2008年）では、2000年に出版された著者の「母の手記」が元隊長の名誉回復や歴史を歪曲しようとする勢力に利用されたことをふまえ、同書の最後に「なぜ<新版>を出さなければならないか」とする章を設け、多くの軍命に関する証拠や新たな証言を加えている。集団自決の歴史的検証に関しては林博史『沖縄戦 強制された「集団自決」』（吉川弘文館2009年）、大城将保『沖縄戦の真実と歪曲』（高文研2007年）他に詳しい。

改めて2007年の教科書検定の文部省の修正意見とはどのようなものであったのか、今一度ふり返ってみたい。

先の県民大会に先立ち、沖縄県歴史強化書協議会は、これまでの沖縄戦に関する教科書の記述に関する諸問題を現場教師・教育委員会・大学識者により特集を組んでいる（『歴史と実践 「沖縄戦と2007教科書検定」 第28号特集 沖縄県歴史教育者協議会発行2007年）。その冒頭には2007年6月19日に那覇市内で実施された「沖縄戦と教科書検定「集団自決」をめぐって」と題して行なわれた座談会が記録されている。その中には沖縄戦に関する執筆者として、文科省の検定に立ち会った石山久雄氏の発言内容が掲載されている。以下に、主要部を抜粋・要約しておきたい。（口語体は「 」発言のまま。筆者抜粋要約）。

石山久男（教科書執筆者）談

「検定というのが、どういう風に行なわれているのかが良くわからないというのが普通

だと思います。必要な限りで少し話しますと、まず最初に、文科省の一室に教科書会社の編集社と著者が「この時期に来てください」と呼ばれ、その場で検定意見書と言われるものを渡されるわけです。それを教科書会社と執筆者が1時間ぐらい検討して、そして、その中には見ただけでその趣旨がわかるのがありますし、単純な誤植とかも勿論ありますが、趣旨がわからないというところもあります。わからないところは「意図するとことを聞かなければならぬので印をつける」。「その後、検定教科書調査官が入ってきて、その時に、一体この検定意見はどういう意味なのか聞く。今回の沖縄戦の検定では「沖縄戦の実態について誤解する恐れのある表現である。」となっているので、なにが、おかしいのかこちらはわからない。ですから当然聞きます。指摘事由はそういう風にきわめて簡単な書き方しかしていません」。「誤解するおそれがあるからもっと詳しく書こうとか勝手な解釈はできない」。結果、調査官趣旨に沿って直さなければ検定には通らない。しかも教科書検定審議会(非常勤)が検定の実質的な権限をもっていて、教科書検定調査官は文科省の常勤職で、この調査官が私たちと直接対応する。結果、質問・反論を述べても「それは私たちにはわかりません。これは審議会の意見です」と逃げられてしまう。今回の誤解するおそれのある表現について調査官が説明したのは「要するに軍の命令が出ていたかについては出ていないだろうという見方が定着しつつあるということです」。「最初の申請本では「日本軍は、県民を壕から追い出し、スパイ容疑で殺害し日本軍の配った手榴弾で集団自害と殺し合いをさせ、800人以上の犠牲者を出した。」と書いてあります。いわゆる「集団自決」の部分については、「集団自害をさせ」の「させ」が問題だ、それが検定意見の趣旨だと言われたわけです。この点については、検定意見の趣旨として極めて明確な形で言われたものですから、それ以外の解釈や直し方はできないという形になりました。その時に「壕追い出しやスパイ容疑による殺害」でいいんですね確認したら「それは事実ですから結構です」と言うんです。日本軍が手榴弾を配ったことについても「事実ですからこれも結構です」と言う。要するに日本軍が「集団自決」を「させた」というところが日本軍が主体となっているのでそれでは困るといのが検定結果として伝達されたわけです」(同上1-15)。

また、他の執筆者の一人坂本昇氏ほかも同様の検定意見の趣旨を調査官から伝えられている(『沖縄のうねり』琉球新報社2007:46-49)。

結果、高等学校歴史教科書において沖縄戦の記述部原文が検定後どのような記述に改変されたのか、『沖縄タイムス』(2007年12月27日版)では、計8社の原文・検定後の記述・訂正申請の記述・再訂正の記述・訂正理由を一覧にまとめ掲載している。本稿では紙面の関係で2社のみ転載しておく(表3)参照。他社における修正箇所もほぼ同様で、日本軍の示唆・誘導・軍命を主体として集団自決が生起きた表現への修正意見が反映されている。また、先に述べたように、沖縄県議会議決・沖縄の抗議県民大会あるいは世論を受けて政府は教科書会社に訂正申請をさせる形で再度の記述変更を認めたが、資料に見る通り日本軍の直接の関与の記述・表現のトーンが低くなる結果となっている。

表3 文科省資料で見る「集団自決」記述の変遷『沖縄タイムス記事』2007年12月27日版より転載

山川出版社「日本史A 改訂版」

原文	検定後の既述	訂正申請の記述	訂正理由
<p>《囲み》 ■沖縄戦 6月末までに日本軍の組織的抵抗は終わった。島の南部では両軍の死闘に巻き込まれて住民多数が死んだが、日本軍によって壕を追い出され、あるいは集団自決に追い込まれた住民もあった。</p>	<p>《囲み》 ■沖縄戦 6月末までに日本軍の組織的抵抗は終わった。島の南部では両軍の死闘に巻き込まれて住民多数が死んだが、そのなかには日本軍に壕から追い出されたり、自決した住民もいた。</p>	<p>《囲み》 ■沖縄戦 6月末までに日本軍の組織的抵抗は終わった。島の南部では両軍の死闘に巻き込まれて住民多数が死んだが、そのなかには日本軍によって壕を追い出されたり、あるいは集団自決に追い込まれた住民もあった。</p>	<p>学習を進める上に支障となる記載(沖縄戦の理解が不十分になる恐れがあるため)</p>

三省堂「日本史A 改訂版」

原文	検定後の既述	訂正申請の記述	再訂正申請の記述	訂正理由
<p>《本文》 さらに日本軍に「集団自決」を強いられたり、戦闘の邪魔になるとか、スパイ容疑をかけられて殺害された人も多く、沖縄戦は悲惨をきわめた。</p>	<p>《本文》 さらに、追いつめられて「集団自決」した人や、戦闘の邪魔になるとかスパイ容疑を理由に殺害された人も多く、沖縄戦は悲惨をきわめた。</p>	<p>《本文》 なかには、日本軍に手榴弾を手渡されて自決を強要された人びと(「集団自決」)②や、戦闘の邪魔になることやスパイ容疑を理由に殺された人びともおり、沖縄戦は悲惨をきわめた。 《側注》(追加) ②沖縄戦のさい、日本軍は住民を総動員化し戦力化した。「集団自決」については軍が関与した「強制的集団死」であるという説がある。</p>	<p>《本文》 この間、日本軍が多くの県民を防衛隊などに動員したうえに、生活の場が戦場となったため、県民の犠牲は大きく、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に殺された人もいた。さらに、日本軍の関与によって集団自決に追いこまれた人もいるなど、沖縄戦は悲惨をきわめた。 《側注》(追加) ②…また最近では、集団自決について、日本軍によってひきおこされた「強制集団死」とする見方が出されている。</p>	<p>学習上の支障(生徒が沖縄戦の全体像をより深く理解するには記述が不足しているため)</p>

(補足説明)

- ・「住民をまきこんだ地上戦」について具体的に記述することによって、沖縄戦の全体像が理解できる記載となっている。
- ・県民が集団自決に追いこまれた背景・要因についても記述されている。
- ・側注の「強制集団死」については「最近の見方」についてのものである。

さらに『琉球新報』2008年12月27日版において、12月4日に文科省が教科書の編集責任者を個別に呼び出し、訂正申請の審査基準をまとめた日本史小委員会としての基本的と捉え方を提示したことを明らかにした。

その内容は以下のとおりである(傍線筆者)。

■訂正文の内容等を審議するに当たっての沖縄線及び集団自決に関する日本史小委員会としての基本的捉え方

◎沖縄戦について

○沖縄では、住民を巻き込んで軍官民一体となった戦時体制の中で地上戦は行なわれた。

○沖縄戦全体において、いかなる事実がどのようにして起こったのかが誠実に探求され、その成果が生徒にしっかり伝わるような記述にならなければならない。

◎集団自決について

○集団自決は、太平洋戦争末期の沖縄において、住民が戦闘に巻き込まれるという異常な状況の中で起こったものであり、その背景には、当時の教育・訓練や感情の植え付けなど複雑なものがある。

また、集団自決が起こった状況を作り出した要因にもさまざまなものがあると考えられる。18年度検定で許容された記述に示される、軍による手榴弾の配布や壕からの追い出しなど、軍の関与はその主要なものとして捉えることができる。

一方、それぞれの集団自決が、住民に対する直接的な軍の命令により行なわれたことを示す根拠は、現時点では確認できていない。他方で、住民側から見れば、当時の様々な背景要因によって自決せざるを得ないような状況に追い込まれたとも考えられる。したがって、集団自決が起こった背景・要因について、過度に単純化した表現で教科書に記述することは、集団自決についての生徒の理解が十分とならないおそれがある。

○集団自決については、沖縄における戦時体制、さらに戦争末期の極限的な状況の中で複合的な背景・要因によって住民が集団自決に追い込まれていったと捉える視点に基づいていることが、生徒の沖縄戦に関する理解を深めることに資するものと考える。

以上は、訂正申請を認めた後での文科省の基本的かつ公式見解である。要するに、集団自決と軍令を切り離すと同時に、集団自決は日本軍により強制された死であることの否定であり、軍による示唆・誘導・命令の記述の削除を求めている。その代わりに様々な背景要因、複合的要因説を持ち出し軍政下の軍命責任・国家責任を回避する指針とも言える。この文科省の見解はその後も現在も変わらない指針である。

さて、一般住民を巻き込んだ地上戦の中、20万人以上の犠牲をひいた日本軍の防衛戦の結果、我々が学んだ教訓の一つは「軍隊は住民を守らない」ことであったと思う（山内健治 2019）。数々の沖縄の一般住民の戦争証言があるが、日本軍の示唆・誘導・命令に関しては多くの歴史学・法学的な論証が多数存在してきた。一例を示すと以下の通りである。

強制集団死の起因要素としての、明治憲法下に規定される軍統帥権・軍政における旧日本軍の指示・軍令とは何か、その法制史的解釈を與儀九英は『集団自決と国家責任』（2006年3月26日）において詳細に検討している。同書の第一章「集団自決経緯」では座間味島及び渡嘉敷島での集団自決に関する自決に至る前、つまり米軍上陸以前の1945年2月8日の現地部隊長の「玉碎訓示」

とその後の軍人行動・言説・民間行政の役割を法学的に位置付けを検証している。第三章「兵事主任」では当時の軍政下での役割を精査し「兵事主任」とは、各市長村単位に配置された民間行政の役人（助役他兼務）であるが徴兵名簿や民間動員そのものを担う役割と同時に軍政・民政の媒介的役割にあったと分析した。與儀は軍統帥権の中では軍の指揮系統の末端に位置すると法的位置を規定している。第三章「軍命」では、軍政権と軍令権の範囲を精査・規定し兵事主任へ課された「軍命」の形態・内容を検討している。結論は兵事主任における任務と口頭での住民への伝達が現地戦闘隊長の「自決の強要を言った、言わない」の論争を超え、両者とも行動・言説は軍命にあたる法制史的論拠を明らかにしている。四章以下では、昭和19年8月31日「沖縄方面陸軍第32軍牛島満司令官訓示」における軍民一体の軍令の位置付けを明らかにし「総括」では集団自決の国家責任の法的根拠を明示した。

集団自決と表裏一体の軍による沖縄住民のスパイ視に関しては、実在する文章記録について先の牛島訓示第七項目「防諜ニ厳ニ注意スヘシ」のみならず、社会学者である石原昌家は、「木戸幸一関係文書」木戸日記研究会編（1966）を丹念に検証した結果、既に1940年には、軍の沖縄民間人の戦争末期における玉碎指針が決定していたこと、沖縄方面の防衛隊派遣当初から住民へのスパイ視を前提とした軍民統制をしていたことを証拠立てる文献文資料についてふれている。石原は当時の木戸幸一関係文章の中に、在沖縄徴兵係役所職員記録より「これら沖縄の人々はほとんど軍隊の精神をもっていない、彼には愛国心という感覚も弱いし、国家組織や、天皇への忠誠心も教え込まれていない。さらには、彼らは日本帝国の運命にまったく関心を欠いている。もし沖縄が外国に支配されたらなら、人々はすぐに新しい支配者に従い始めるだろう。つまり彼らを当てにすることはできない」というメモの存在を明らかにしている（Ishihara Masaie 2001: 102 - 105）。

最近まとめられた『沖縄県史第6巻沖縄戦』（2019）では、林博史は第一章第三節「強制された集団自決」「強制集団死」と題して、改めて第三二軍の「軍官民共生死の一体化」の中で軍命として集団自決にいたった経緯を多くの証言記録より明確にまとめている（林博史 2017: 516 - 533）。以上、集団自決と日本軍の関与と軍命を明確化する一部の論考を紹介してみた。

毎年、沖縄を訪問する修学旅行の中高校生たちが体験する平和学習には自決壕の前で慰霊、あるいは避難壕での暗闇での体験学習が含まれることも少なくない。そうした平和学習において、集団自決の直接の原因が眼前に迫る敵軍の艦砲射撃・空爆・銃撃音の恐怖、あるいは敵の捕虜となった場合、強姦や虐殺を受ける等の流言を信じた心理的パニック状態の複合的要因が一義的契機として集団自決が生起したと説明して理解できるのであろうか。当然、高校生がその理由のみでは納得できないのは明らかであろう。最も重要なのは日本軍の軍事環境が存在していたからである。

最後に2007年9月26日の県民大会で読谷村高校の2人の生徒が読み上げた大会に向けたアピールを掲載して本節をおわりたい。

「この記述をなくそうとしている人たちは、沖縄戦を体験したおじい、おばあが嘘をついてい

ると言いたいのだろうか。私たちおじい、おばあから戦争の話を知ったり戦跡を巡ったりして沖縄戦について学んできた。「チビチリガマ」にいた人たちや肉親を失った人たちの証言を否定できるのか」(津嘉山拡大さん)。

「私は将来高校の日本史の教師になりたい。このまま検定意見が通れば、私は事実ではないことを教えなければならない。教科書のたった一文、たった一言かもしれないが、その中に失われた命と、二度と戦争を繰り返してはいけないという県民の思いがある。嘘を真実と言わないでほしい。あの醜い戦争を美化しないでほしい。例え醜くても真実を知りたい、学びたい、そして伝えたい」(照屋奈津子さん)。

図7-a 2007年9月29日県民大会会場



筆者撮影

図7-b 2007年9月29日県民大会会場



筆者撮影

結びにかえて

本拙稿では人類学の立場から沖縄の民俗文化の記録をしてきた私が、なぜ沖縄戦の体験者から戦争の話を知り、それを記録をするのかについては、冒頭でも述べたが、それは学問的設定からではなく、フィールドから学んだ私への重い宿題であり続けてきた。また、戦争証言の記録は、筆者のそれまでの調査における調査者と被調査者あるいは、インタビュアーとインフォーマントの信頼関係といった自明の調査法やモラルをはるかに超えて複雑でありかつ困難であり続けてきた。さらに、収集された膨大なオーラルヒストリーの文字化と整理を困難にしてきたのは、その公開性・公平性・客観性という学問的方法論上の再検証を度々迫られ、時にそうしたプロセスを破棄してみたいと感じてきた。また、その表現方法や対象とする関心も論文のみだけではなく、映像や写真・歌・絵画ほかの芸術作品に至るまで拡大し続けてきた。

戦争未体験者が戦争体験を記録することの意味と課題を自問自答しながらも、その学問的課題の多くは、未だ未解決のまま現在に至っている。

大学で教鞭をとる者として毎年、必ず一度は沖縄県下で学生調査合宿を実施してきた。彼女らの卒業論文のテーマも、ここ20年だけでも多様に変化して、現在では、民間信仰からフィー

リングスポット、観光開発から沖縄の現代POPsまで幅広い。ゼミ調査の共通テーマなど、とてもまとめきれない。それでも、ゼミ合宿中には、必ず参加学生にチビチリガマほか、何らかの戦跡を1度は巡るように勧める。学生たちは私が言う以上に自ら調べて宿に戻ってくる。彼らが今、目にしている平和な沖縄の風景と過去に深く眠る戦争の記憶や負の遺産は、彼らのテーマが、まちづくりや現代音楽であろうと、そこに新たな視点を与えているように思う。そしてそれが、私の沖縄ゼミ合宿の目的の拠り所である。

戦争体験記録を通じて、今ひとつの私の課題は研究・学問・教育の社会的貢献とは何かである。戦争体験の記述と分析は、仮説・理論がありデータを解析するといったオートマチックな論文作成のプロセスではない。個々人の体験と記憶による膨大な口頭伝承を目の前にして、それを何らかの媒体で公表・公共化を図る義務が私の側に課せられる。愚直なまでの文字起こしそのものが基礎研究を形成しているのであるが、それ以上に教育や研究の現場だけではなく今の社会へそして将来へどのように還元していくのかこの課題が最も大きな現在の筆者の課題である。

本稿末尾ながら、戦争体験の映像記録を通して沖縄戦とその記録について多くのことを学ばせていただいた琉球弧を記録する会の方々、チビチリガマの証言や壕の保存に尽力され数度となく学生たちにガイドをしていただいた知花昌一氏、2007年当時沖縄県教職員組合委員長をなさっていた大浜敏夫氏（明治大学政治経済学部・1970年卒業）、鳥唄く艦砲ぬ喰えー残さーの背景や歌詞の意味を教えていただいた鳥袋艶子さんはじめ「でいご娘」のみなさん他、多くの方々に感謝申し上げます。そして、何より話しにくい戦争体験を語っていただいた方々にお詫びと御礼を申し上げ、また全ての戦没者の方々へ黙祷を捧げ本稿を結ばせていただく。

参考文献

- 秋山道宏（2019）「沖縄戦体験の継承活動」『沖縄戦を知る事典 非体験者が語り継ぐ』吉川弘文館
- 安仁屋政昭・比屋根照夫・北村毅・謝花直美他16名（2007）『沖縄戦と「集団自決」何が起きたか、何をたえるか』「世界」臨時増刊no.774 岩波書店
- 大江健三郎（1970）『沖縄ノート』岩波書店
- 大城将保（2007）『沖縄戦の真実と歪曲』高文研
- 大田昌秀（2014）『決定版 写真/記録 沖縄戦—国内唯一の“戦場”から“基地の島”へ』高文研
- 沖縄県教育委員会（2017）『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』
- 沖縄県教育庁文化財課史料編纂班編集（2017）『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』沖縄県教育委員会発行
- 沖縄県歴史教育者協議会編（上里勤・里井洋一・地主園亨・山口剛史）（2007）『歴史と実践第28号「沖縄戦と2007教科書検定」』沖縄県歴史教育者協議会
- 沖縄県読谷村史編集委員会編（2002）『読谷村史 第五巻資料編4戦時記録 上巻』読谷村
- 沖縄県読谷村史編集委員会編（2004）『読谷村史 第五巻資料編4戦時記録 下巻』読谷村
- 沖縄県読谷村史編集室（2007）『読谷村の戦跡めぐり』読谷村役場
- 同デジタル版：<https://yomitan-sonsi.jp/sonsi/senseki/map/index.html>
- 沖縄県読谷村史編集委員会編（2002）『読谷村史 第五巻資料編4戦時記録 上巻』読谷村
- 沖縄県読谷村史編集委員会編（2004）『読谷村史 第五巻資料編4戦時記録 下巻』読谷村
- 仲田晃子（2019）「いき残ったひめゆり学徒の戦後」『沖縄戦を知る事典 非体験者が語り継ぐ』（154-

155) 吉川弘文館

防衛庁防衛研修所戦史室 (1968) 『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲出版社

林博史 (2017) 「第1章第節 強制された「集団自決」強制集団死」沖縄県教育庁文化財課史料編纂班編 (2017) 『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』(516 - 533 所収)

比嘉豊光 (2007) 『わった～島クトゥバで語る戦世684』

宮城春美 (2008) 『母の遺したもの 沖縄・座間味島「集団自決」の新しい事実』高文研究

山内健治 (2021) 沖縄戦の記憶と平和創造一次世代への継承『平和創造学への道案内 歴史と現場から未来を拓く』法律文化社

同 (2019) 『基地と聖地の沖縄史』吉川弘文館

同 (2008) 「沖縄戦」渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也編『沖縄民俗事典』吉川弘文館

同 (2007) 『戦争の記憶と伝承に関する研究—沖縄戦の伝承に関するハワイ移民と母村の比較研究』科研基盤研究 (C) 研究成果報告書

山口剛史 (2017) 「第三章三節 沖縄戦と教科書」『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』(694 - 706)

與儀九英 (2006) 『集団自決と国家責任』精印堂印刷

吉浜忍・林博史・吉川由紀編著 (2019) 『沖縄戦を知る事典 非体験者が語り継ぐ』吉川弘文館

琉球弧を記録する会編『島シマクトゥバで語る戦世—』琉球弧を記録する会発行

同 (2003) 『島クトゥバで語る戦世—100人の記憶ナナムイ・神歌—』琉球弧を記録する会

琉球新報社 (2007) 『沖縄のうねり 集団自決「軍命」削除の教科書検定抗議』琉球新報社

Ishihara Masaie: (2001) *Memories of War and Okinawa Perilous Memories The Asia-Pacific War(s)* ed. T.Fujitani,Geoffrey M,White and Lisa Yoneyama. DukeUniversity Press

Geoffrey M,White (2001) : *Perilous Memories The Asia-Pacific War(s)*.

ed. T.Fujitani,Geoffrey M,White and Lisa Yoneyama,ed.DukeUniversity Press

(1995) : *Memory Wars : The Politics of Remembering the Asia-Pacific War. Analysis from the East-West Center* No.21, East-West center.